探検家ピエール・サヴォルニャン・ド・ブラザ

おやさと研究所准教授
森　洋明　*Yomei Mori*

コンゴ共和国の首都ブラザヴィルは、アマゾン川に次いで世界第２位の流域面積を誇るコンゴ川の右岸に広がっている。川向こうにはコンゴ民主共和国の首都キンシャサが見える。両国は川沿に競い合うかのように、ホテルや官庁、オフィスビルなど繁栄の象徴となる立派な建物を並べている。そのなかの一つにブラザヴィル市庁舎がある。そこはかつて植民地政府の中心地だった。現在の市庁舎は 1963 年に建設されたものだが、正面に広がる通りには植民地時代の面影が今も残されている。市庁舎のすぐ横には、ブラザヴィルの地名にもなった探検家ピエール・サヴォルニャン・ド・ブラザ（Pierre Savorgnan de Brazza）のメモリアルホールがある。2006 年に完成したもので、柵に囲まれ、きれいに整備された公園内には、一際目立つ彼の大きな像が建っている。

メモリアルホール前のブラザ像

ピエール・サヴォルニャン・ド・ブラザは 1852 年、イタリアの貴族の家系に生まれた。フランスの航海学校で航海術を学び、若くして海軍の将校となった。17 歳のときにはアルジェリアに出向している。そこでフランス軍に対抗するベルベル人の抵抗運動を目の当たりにした。現地の人たちが植民者に激しく抵抗する姿は、その後の彼の植民地統治に対する考え方を方向づけたと言われている。

当時フランスは、第三共和政（1870 ～ 1940）下であり、他のヨーロッパ諸国同様、アフリカの植民地政策を推し進めていた。前回にも触れたが、黒人奴隷貿易が欧州の各国で禁止されていくなか、産業革命を支える資源を求めるべくヨーロッパの国々は探検家・冒険家を派遣し、アフリカは少しずつ「発見」されていく時代であった。その後ブラザは、私財を投入し現在のガボンに出向。オグエ川を遡る探検を行った。この川はガボンの中央を横断するように流れていて、全長 900 キロメートル。水源は現在のコンゴ共和国にあるが、当時この川はヨーロッパ人にとっては未知であり、コンゴ川の支流だとも考えられていた。

この時代「暗黒大陸」であったアフリカの川に関する情報は貴重だった。道路が整備されていない状況で、川を遡ることが、探検家にとって奥地へ向かう唯一の手段だったのだろう。たとえば、サハラ以南を横断するかのように流れるニジェール川も、その存在は知られていたが、水源はおろかどこに流れ込んでいるのかすら知られていなかった。ムンゴ・パークやルネ・カイエ、ハインリヒ・バルトなどが、「黄金の街」と称されたトンブクトゥを目指す探検によって、この川のことも少しずつ解明されていくが、それでもナイル川やコンゴ川の支流とさえ思われていたようだ。ニジェール川がギニア湾に注いでいることが確認されたのは、19 世紀になってからのことである。

フランス国籍を取得したブラザは、1875 年フランス政府の後ろ盾を得て再びガボンに向かい、オグエ川を遡っていく探検を行った。それは３年に及ぶ旅だった。未知の世界である内陸部への進行は常に危険を伴った。病気は言うまでもなく、出会う人たちが常に友好的とは限らない。未開の土地での食料の確保も大変だっただろう。命を落とした人たちも少なくなかった。ブラザがオグエ川の源流を目指す旅も困難の連続だった。結局、この探検では川の水源までたどり着くことはできなかったが、それでもこの時、オグエ川とコンゴ川は別であるということは確認された。

フランスに戻った翌年の 1879 年、政府の後押しで２回目の航海が決定された。隣国のベルギーが探検家スタンリーを使ってコンゴ川左岸の開発に乗り出していた。フランスとしても遅れをとるわけにはいかなかった。こうしてブラザは、三度ガボンへ向かった。このときはパリ地理学会がこの航海に資金面で協力をしている。1879 年 12 月に河口からオグエ川を航行し、翌年８月、遂にコンゴ川に辿り着くのだった。月明かりのなかで初めてコンゴ川と出会った彼は「この銀色に輝く広大な水面は、高い山の陰のなかに溶け込んでいくかのようだった。北東の方は、まるで海の水平線のように見えた。川は私たちの足下を厳かに流れており、辺りの自然はその穏やかな流れのなかで乱されることなく眠ったままだった。」と手記に記している。彼にとって、さまざまな危険を乗り越えて辿り着いたコンゴ川との出会いは幻想的なものだったようだ。

住民が仕掛ける罠を常に警戒しつつも、暗闇のなかの歩みを進めていくと、やがて遠くに灯りが見えた。そこはテケ族が住む村だった。ブラザは行く先々で、できるだけ争いを避け、現地の人たちと友好関係を結ぶことで、信頼を得ていった。たとえば、ある村を出発する際に、村の責任者の弟が亡くなったことを知ると、すぐに彼の家を訪れ、死者に対して「我が兄弟よ、より素晴らしい世界で目覚めなさい。そしてその肉体は家族とともに永遠の安らぎにつくだろう」と声をかけたエピソードも残っている。

また、当時すでに奴隷貿易は禁止されていたが、アフリカ大陸では奴隷狩りがまだまだ横行しており、人身売買も続いていたようだ。ブラザは捕らえられた奴隷を見つけては、解放することに尽力したという。こうした彼の姿勢は近隣の人たちの噂となり、三色旗を見ては救いを求めて人たちが集まったとも言われている。アルジェリアで見たベルベル人の抵抗の姿が彼をそのようにさせていったのかもしれない。

1880 年８月 28 日、ブラザは遂にマココ王が住む村に到着する。偉大な王に謁見するのに相応しい服として、彼は軍服しか持ち合わせていなかった。一方、周囲からの連絡ですでに「フランス人」の訪問を知っていたマココ王は、ブラザを歓迎する準備を整えていた。ブラザがコンゴ川の近くに開発の拠点を置きたいと訪問の目的を伝えたところ、マココ王はそれを快く承諾し、９月 10 日、両者で条約を交わされた。ブラザに王国の領土の一部が譲渡されたことで、やがてそこがフランスの赤道アフリカ植民地の拠点となっていくのだった。

［参考文献］

Jean MARTIN, *Savorgnan de Brazza -Une épopée aux rives du Congo,* Les Indes Savantes, 2005.